

## 調査報告

## 夜のお茶の間～エンパワメントの視点における地域実践

大川 浩子・本多 俊紀\*・脇島 久登\*

## Yoru no Chanoma (Evening Get-togethers) - Local Practice from the Viewpoint of Empowerment

OHKAWA Hiroko, HONDA Toshinori and WAKISHIMA Hisato

**Abstract:** “Yoru no Chanoma” were started in Niigata Prefecture in 1997 by Keiko Kawada who felt that the current nursing-care system did not relieve loneliness. Anyone can attend these get-togethers no matter what their age. As of 2005, there were more than 1,000 such activities within the Prefecture and they had also spread outside the Prefecture. Shiroishi-ku in Sapporo is one of these and is a region that has initiatives for lively activities concerning “Chiiki no Chanoma(Local Get-togethers)” and holds “Chiiki no Chanoma Public Summits,” etc. A special non-profit corporation “Communit Rakuso” in this district holds evening “Yoru no Chanoma” jointly with “Minna no Chanoma Kuru Kuru” (Everyone comes to the Evening Get-togethers).

Questionnaires and interviews with “Yoru no Chanoma” users were conducted based on research into literature on the development of “Chiiki no Chanoma”. The results of this showed that, by holding “Chiiki no Chanoma” in the evenings rather than during the day, it was easier for the younger generations to participate and further, that the reasons for use were, for example, “relaxation / refreshment”, “obtaining information” and “sharing the same aims,” etc. Furthermore, it is considered that “Chiiki no Chanoma” including “Yoru no Chanoma” have similar characteristics to those of self-help groups and that they are a place where participants can be empowered.

## はじめに

平成20年度厚生労働白書では、家族形態の変化として「夫婦のみの世帯」や「単独世帯」の増加が言われ、特に「単独世帯」は今後も増加し、2030年には37.7%と全体の4割近くに達すると予想されている。この単独世帯は、世帯員相互のインフォーマルな支援が期待できないことから、相対的に失業や疾病・災害といった社会的リスクに弱く、地域や社会による支援がより必要になることが考えられる。また、大都市における人口の流動性の高まり等により、中山間地では若年層を中心とした人口流出があり、地域社会における支え

合う関係の脆弱化が起こることも考えられ、更に、今後の人口構造の変化によって、地域社会の維持さえ難しい状況が増加することも懸念されている<sup>1)</sup>。地域社会における支え合う関係の脆弱化は、自殺、孤独死、虐待等の社会問題につながる「孤立化」を引き起こしていると思われ、まさに、今、社会における地域で支え合うための「つながり」が求められている。

近年、地域での人と人とのつながりを生み出す活動のひとつとして「地域の茶の間」がある。「地域の茶の間」とは、地域のなかに、気軽に人と話をしたり、人と出会える場、交流する場があればという思いから始まった活動である<sup>2)</sup>。今回「地

域の茶の間」及び「夜のお茶の間」の実践状況について文献による調査を行い、更に「夜のお茶の間」に関するアンケート調査・面接調査の結果から、開催時間帯ごとの効果とその要因について考察を加え報告する。

### 「地域の茶の間」とは

「地域の茶の間」は1997年に新潟の河田圭子氏が始めた活動である。河田氏が独居高齢者に対する訪問介護の中で、現在の介護のシステムだけでは寂しさが癒されず、更には介護をする家族の側も孤立し、双方が疲弊しかねないと感じたことがきっかけとなっている<sup>3)</sup>。開催場所は個人の自宅、公民館、商店街の空き店舗等であり、運営主体はボランティア、JA、社会福祉協議会、自治会・町内会等の場合が多い。そして、参加費はお茶代や食事代程度(100円～500円が多い)であり、年齢を問わず、誰もが自由に参加できる場となっている<sup>2)</sup>。「地域の茶の間」は身近な地域住民の憩いの場、生きがいの場となっており、近年では、各地域の特性に合わせ多様に変化して開催されている。「地域の茶の間」では、もともと参加する際の決まりごととして、「あの誰?という目つきをしない」「仲間はずれにしない」「排除しない」「できることは自分で」「エプロンをして茶の間に入らない」の5点が掲げられている。「地域の茶の間」の本質は誰もが気兼ねなく自由に過ごせる空間を持つことであるが、中にはこの本質を持ち合わせていない所もあるとされている<sup>2)</sup>。

「地域の茶の間」が生まれた新潟県では、平成13年～平成23年までの長期総合計画として全県普及事業にも組み込まれている<sup>3)</sup>。その結果、2003年12月現在、新潟県内773ヶ所で「地域の茶の間」が実施され<sup>4)</sup>、2005年では1000ヶ所を超え、県外にも広がっている<sup>5)</sup>。

### 札幌市における展開と「夜のお茶の間」

北海道における「地域の茶の間」の実施数については、正確な数は把握されていないが、ボラナ

ビ倶楽部HPで紹介している「北海道お茶の間めぐり」によると約300ヶ所となっている<sup>6)</sup>。しかし、このHPでは「地域の茶の間」以外に、「札幌市シニアサロンモデル事業」、「ふれあい・いきいきサロン」をはじめ、特定の対象者(町内会の方、60歳以上の方、子育て中の方等)向けの活動も紹介されているため、従来の「地域の茶の間」はこの数より下回ると思われる。

2005年に区の広報誌で「地域の茶の間」を取り上げた札幌市白石区では、区内で実施されている4ヶ所の「地域の茶の間」の紹介<sup>5)</sup>以外にも、2006年10月に「地域のお茶の間公開サミット」を開催し、立ち上げ方や市民に直接体験してもらうためのさまざまな企画が実施されている<sup>2)</sup>。更に近年では、ワーカーズコレクティブが運営主体となり、区内で「地域の茶の間」を開催している<sup>7)</sup>。

このような活発に「地域の茶の間」に関する活動が展開されている札幌市白石区にある特定非営利活動法人コミュニティ楽創(以下、NPO法人コミュニティ楽創)<sup>注1)</sup>では、事業委員会の1つである地域ネットワーク委員会<sup>注2)</sup>で2005年8月より「夜のお茶の間」を開催している。これは、「地域の茶の間」の実施時間を夜にすることで仕事を持っている人、子育てや介護等で家族が帰宅するまで外出できない人が利用可能になると考えたためである。運営はNPO法人コミュニティ楽創地域ネットワーク委員会と「地域の茶の間」を実施しているみんなのお茶の間「くるくる」との共催である。「夜のお茶の間」は月1回、18:00(現在は18:30)～21:00にみんなのお茶の間「くるくる」で実施していたが、2006年度より実施場所を増やし、隔月で白石まちづくりハウスでも行っている。参加人数の幅は3～17名であり、1回当たり4～6名の参加者であることが多い。内容としては、参加費500円で夕食を作り、会食している。食事の内容や材料の買出しについては委員会で準備しているが、作業については参加者が自主的に行っている。「地域の茶の間」で心がけていることを踏襲し、他に特別なプログラムは設

けられておらず、実施時間内であれば自由に参加することが可能である。

## 調査方法

今回、「夜のお茶の間」について、アンケート調査及び面接調査を実施した。アンケート調査は「夜のお茶の間」が開始されてから11ヵ月後に、面接調査は29ヵ月後に行った。各々の実施方法は下記の通りである。

### 1) アンケート調査 (2006年6月実施)

過去に「夜のお茶の間」を利用したことがあり、調査への同意が得られた協力者10名に対し、個別面接質問紙調査を行った。調査内容は、①基本属性(性別、年齢)、②「夜のお茶の間」の参加回数ときっかけ、③参加の感想、④今、自分がほしい地域の資源、⑤その他(自由回答)とした。これらの項目について調査者が協力者に尋ね、回答を記入した。

なお、アンケートの回答者は10名の属性(性別、年齢、日中の活動状況等)については表1の通りである。

表1 アンケート協力者の属性

性別	男性 8名 女性 2名
年齢	20代 1名 30代 6名 40代 1名 60代 2名
日中の活動	就労・福祉施設を利用 9名 その他 1名
夜の茶の間の利用回数	5回未満 5名 5～8回 2名 9回以上 3名
夜の茶の間を知ったきっかけ(複数回答あり)	コミュニティ築創の会員 7名 主催者 2名 会員に誘われて 1名 ポスターを見て 2名 他の地域の茶の間の利用者 1名

### 2) 面接調査 (2008年12月実施)

2008年12月に開催された「夜のお茶の間」に参加し、同意の得られた協力者3名に対し、面接調査を実施した。面接は「夜のお茶の間」が終了した後、約30分間、グループにて行った。質問項目は、①「地域の茶の間」との出会い、②「地域の茶の間」の魅力、③開催時間による「地域の

茶の間」の特徴、④その他(自由回答)とした。面接内容は調査者が筆記で書きとめた。

協力者3名の属性と背景は以下のとおりである。

はなさん(仮名):60代の女性。定年退職後、自宅の一部を開放して「地域の茶の間」を主宰している。また、近隣の「地域の茶の間」にも企画者、参加者として関わっている

まささん(仮名):40代の男性。「夜のお茶の間」の会場近くで一人暮らしをしている。日中は福祉施設に通所。NPO法人の会員でもあり、様々な事業に参加している

のんさん(仮名):30代の男性。福祉施設(まささんの通所施設とは別の施設)の職員であり、NPO法人の理事。この「夜のお茶の間」の主催者の一人である。3名の中では唯一、白石区外に居住している

## 調査結果

### 1) アンケート調査の結果

「夜のお茶の間」に参加した感想及びその他の項目であげられた「夜のお茶の間」に関する内容は以下の5つに分類することができた(図1)。

- ① 他者との交流:人との交流やその効果に関すること
- ② 場に対する安心感:ほっとする、温かい雰囲気迎えてくれた等
- ③ 知識と体験:「夜のお茶の間」で体験したことを活用した経験に関すること
- ④ 企画側の思い:企画者側の思いや希望に関すること
- ⑤ 希望・課題:「夜のお茶の間」に関する希望や課題に関すること

また、自分がほしい地域の資源としては、食事ができる場所や居場所として利用できる場所(定食屋、飲み屋等)をあげた者が多かった。他には仕事関係や職場の近くで利用できる施設等があげられた。

図1 「夜のお茶の間」参加者の感想

## &lt;他者との交流&gt;

- ・ 親密に話しあえてよかった
- ・ 身近な人が増えた気がする
- ・ 自分より若い人と食卓を囲むのは久しぶりでした
- ・ ご飯も食べられて、話もできて楽しかったです
- ・ 人と話すことでストレスが発散される

## &lt;企画側の思い&gt;

- ・ みんなが喜んでくれるのが嬉しい
- ・ 自然な感じで楽しんでいてくれることが嬉しい
- ・ もっとたくさんの方が来てくれたらいいな
- ・ 場所がもう少し広いと提供できるものも広がるのではないかな

## &lt;知識と体験&gt;

- ・ 鍋がおいしかった。家でもやった

## &lt;場に対する安心感&gt;

- ・ 家の近くにこういう所があると心強い
- ・ 気軽によれる所があるとは知らなかった
- ・ 楽しい。来たらほっとする
- ・ 場所がきれいで、障害をもった人達の活動も理解してくれそうで、温かい雰囲気でも迎えてくれた
- ・ 家族的、兄弟的雰囲気でもよかった

## &lt;希望・課題&gt;

- ・ 最初は緊張するが徐々に慣れてきた
- ・ 鍋がおいしかった。家でもやった
- ・ 昼間の地域の茶の間にも来たいです
- ・ だったらできる場所が増えたらいい
- ・ お酒も飲めるといいな

表2 今自分がほしい地域の資源

## &lt;食事・居場所&gt;

- ・ 地域の茶の間がたくさんできるといい
- ・ 夜、軽食が食べられてマンガが読めてコーヒーが飲める場所
- ・ 気軽に行ける飲み屋
- ・ 弁当屋(夜遅くなる人が多いから)または食べれる場所

## &lt;仕事関係&gt;

- ・ インターンシップをやってくれる場所
- ・ 自然食品を扱っている店

## &lt;職場の近くにほしい施設&gt;

- ・ 銀行がほしい
- ・ ガソリンスタンドがほしい
- ・ コンビニエンスストア

## &lt;その他&gt;

- ・ テニスのための人と時間がほしい
- ・ 公衆電話の復活

## 2) 面接調査の結果

「地域の茶の間」との出会いは三者三様であり、「勉強会で知った」「家の近くにありながらも知らなかった。NPO法人の会員に誘われて知った」「清水義晴さん(新潟在住の地域づくりアドバイザー)から話を聞いていたが、はなさんがやっている「地域の茶の間」が初めて」であった。

3名から語られた、「地域の茶の間」の良さは表3の通りであり、「気楽さ」「温かさ」「リフレッシュの場」等があげられていた。また、開催時間帯による「地域の茶の間」の特徴について、表4にまとめた。昼に開催されている場合は、子どもや第一線を退いた世代の参加者が、近所で行く場所があり楽しく過ごせる場となっていることがあげられていた。それに対し、夜に開催されている場合は、「大人の児童館」という言葉が示すように、「昼間の忙しさのリフレッシュ」や、「知らない世界のことを聞ける」「同志的な感じ」等があげられていた。

「地域の茶の間」に対する希望と課題としては、多くの人に参加できるチャンス(多様な開催場所



と時間帯)があった方がよいこと、特に、規模は大きくない方がよいこと(3名とも一致)が話された。また、自宅から遠くなると参加が難しくなること、必要でも経済的な余裕がない等の理由で参加ができない人もいるのではないかということが話された。

表3 地域の茶の間の良さ

<ul style="list-style-type: none"> <li>・一言では言えない。雑多な感じ。何でも良いところ</li> <li>・いつ来てもいつ帰ってもよい気良さ</li> <li>・一人暮らしなので温かさを感じる</li> <li>・ゆっくりできる。肩肘張らない。のびのびできる</li> <li>・ふっと一息つける</li> <li>・落ち着く。昼間の愚痴が頭にあるけどそれが消える。ここに来ると、気にならなくなる</li> <li>・当日の準備が面倒と思うが、来ると楽しいし、リフレッシュできる</li> </ul>
--

表4 開催時間帯による「地域の茶の間」特徴

昼に開催した時の特徴	夜に開催した時の特徴
<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼は子どもがいるので遊べるのなら一緒に遊びたい</li> <li>・(参加者が)仕事をしている人ではなかったり、日中の活動の場を求めている人の行き場</li> <li>・(参加者は)現役からしりぞきつつある人が多い</li> <li>・近所に出かける所があればいいという個人のニーズ(友人が欲しいなど)</li> <li>・楽しくしゃべって、お互いに物をもらったり、満足、楽しく過ごす</li> <li>・(主宰者であるが)計画的に活動しない。ここで楽ができる時間。自分もそうしている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼活動している人が自分のために使える場。現役世代の人が求めていくのでは</li> <li>・居酒屋の暖簾くぐりの儀式がない感じ。大人の児童館</li> <li>・子どもがいない</li> <li>・地域ネットワーク委員会の事業なので地域ネットワークのために集って語り合う</li> <li>・同志的な感じ。知らない世界のことなど聞いて自分が充電できる。話しながら、何かそれぞれが向かうものを持っている</li> <li>・昼間の忙しさが中和される</li> <li>・野菜が食べられる</li> </ul>

## 考察

### 1) 「地域の茶の間」の開催時間を夜に実施することの効果

今回、「夜のお茶の間」に参加した経験のある人に対しアンケート及び面接調査を行った。既に、「地域の茶の間」の参加者に対するアンケート調査は渡邊<sup>8)</sup>が実施しているが、参加者は65～74歳が一番多く、仕事に就いていない者が74.7%であると報告している。また、「札幌市シニアサロンモデル事業」、「ふれあい・いきいきサロン」が「地域のお茶の間」の枠組みのなかで紹介されている<sup>4)</sup>ことから、従来の「地域の茶の間」では高齢者層参加(あるいは参加への働きかけ)が多いことが考えられた。それに対し「夜のお茶の間」の参加者はアンケート調査では30代が最も多く、日中は職場や施設利用等の所属を持っている者が多かった。これらのことから、まず、「地域の茶の間」の開催時間を夜に設定することで、今までの「地域の茶の間」では利用が少なかった若い世代が利用しやすくなると思われた。

また、参加者の年齢層が異なることで、特徴や参加者が求めるものも異なっていることが考えられた。表4の「開催時間帯による「地域の茶の間」特徴」では、昼に開催されている場合は、子どもや仕事等から離れた高齢者の参加者が、近所で行く場所があり楽しく過ごせる場となっていることが話されており、「交流」や「楽しく満足できる」ことが求められていると考えられた。特に、子どもの参加もあることから、世代を超えた交流の場としても期待できると思われた。一方、夜に開催される場合は、「昼間の忙しさのリフレッシュ」や、「知らない世界のことを聞ける」「同志的な感じ」等があげられており、昼に開催する場合よりも、「息抜き・リフレッシュ」「情報を得る」「同じ目的を共有する」ことが参加者の目的になっていると思われた。更に、「野菜が食べられる」と語られているような食事に関する希望や要望が高くなっていることも、昼に開催する場合と異なる

傾向の1つであると考えられた。アンケート調査でも食事と居場所に関する場が求められており、若い世代が求めているものを「夜のお茶の間」で提供できる可能性があると思われた。

## 2) 「地域の茶の間」の効果とその要素

アンケート調査から、「他者との交流」「場に対する安心感」「企画側の思い」の3点が「夜のお茶の間」の参加感想として多くあげられていることが分かった。この結果は渡邊の報告<sup>8)</sup>では、「地域の茶の間」が果たしている役割として、「居場所づくり・話し相手の場・交流の場・仲間づくり・拠り所」「精神的・身体的健康の保持の場」「生きがいを得る場」の3点が上位になっていることや、河田氏が月に1回でも集まって、楽しくおしゃべりができたりする場があればよいと思い始めた点<sup>3)</sup>とも一致していると思われる。

「地域の茶の間」がこれらの役割を果たしている要因としては、“世話をする人とされる人が分けられていない（エプロンをして茶の間に入らない）”という点が心がけられており、結果として参加者の対等性というセルフヘルプグループと共通する特性を生み出していると考えられた。セルフヘルプグループ理論はコミュニティ・エンパワメントに有効な理論としても紹介されている<sup>9)</sup>。その特徴<sup>10)</sup>として、①主体性の尊重、②対等性の維持、③体験談の交換、④安全性の確保、⑤体験的な知識の形成、⑥体験的な知識に基づく生き方の6点があるが、「地域の茶の間」に参加する際の決まりごとである「あの人誰？という目つきをしない」「仲間はずれにしない」「排除しない」「できることは自分で」「エプロンをして茶の間に入らない」の5点と比較すると、先に述べた②対等性の維持以外に、①主体性の尊重、④安全性の確保が共通する特徴であると考えられた。

また、「夜のお茶の間」の感想でもあげられていたが、「地域の茶の間」は人との出会い、つながりが持てる場であり、この他者との交流がセルフ・エンパワメントの実践につながっていたと考

えられた。安梅<sup>11)</sup>は、セルフ・エンパワメントの「セルフ」のについてカッコつきのセルフであり、あくまでもひとりで成立するものではなく相対的な意味で存在していると述べている。セルフ・エンパワメントの方法を表5に示したが、この中で「他者との関係で共感と寛大な心を達成する努力」や「親しい友人のネットワークを発展させはぐくむ」を他者との交流によって実践することができていると考えられた。

表5 セルフ・エンパワメントの方法

1.	日々の生活の中でのバランス達成への努力
2.	他者との関係で共感と寛大な心を達成する努力
3.	親しい友人とのネットワークを発展させはぐくむ
4.	心に栄養を与え身体を動かす
5.	記録に残す
6.	自分の人生に対して責任を負う
7.	耐えることを学び、そして他者が耐えることを支援する
8.	してみたいと思うことをするための時間はいつでも十分にある
9.	自分自身を信頼する
10.	言い訳しない

エンパワメントとは、元気にすること、力を引き出すこと、そして共感に基づいたネットワーク化といわれている<sup>11)</sup>。従って、「地域のお茶の間」はエンパワメントを引き出す場になっていたと考えられた。

## 結語

今回、「地域の茶の間」について実施状況を文献で調査したことをふまえ、「夜のお茶の間」に関しアンケート調査及び面接調査を行い、「夜のお茶の間」や「地域の茶の間」の効果とその要因について検討を行った。少ない調査結果ではあるが、「夜のお茶の間」をはじめとする「地域の茶の間」がセルフヘルプグループと共通する特徴を持ち、地域におけるエンパワメントを生み出す場

になる可能性が考えられた。「地域の茶の間」は誰もが元気になれるエンパワメントされる場であり、今後、「孤立化」が生み出す様々な社会的問題に対する解決策の1つになると思われた。

## 謝辞

本調査を実施するにあたり、ご協力いただきました皆様に感謝いたします。

なお、「夜のお茶の間」は2005年度ブルーアース基金の助成を受けています。

注1：NPO法人コミュネット楽創は、障害者福祉の増進を図ることを目的に2003年11月に設立された法人である。会員は2009年1月現在で約40名であり、構成としては障害当事者、医療・福祉領域の支援者が多くを占めている。法人では地域活動支援センター及び通所授産施設の運営、講演会の企画、運営等の事業を行っている。

注2：地域ネットワーク委員会はNPO法人コミュネット楽創の目的である「障がいを持った方等に対し、個人・団体・関連諸機関との交流を通してネットワークを構築・活用し、生活支援・共同作業所等の福祉施設の運営・就労支援事業などを行い、福祉の向上に寄与する」に対し、特に地域でのネットワークの構築を意識し、設置された事業委員会である。過去の事業内容としては、リサイクルに関する講演会の開催（他NPO法人と共催）、法人広報誌の発行、WRAP（Wellness Recovery Action Plan）の普及啓発に関するワークショップの企画・開催などがある。

## 文献

- 1) 厚生労働省編：厚生労働白書（平成20年版）．株式会社ぎょうせい，pp48-50，2008.
- 2) 渡邊敏文：地域福祉における住民参加の検証 住民参加活動を中心として．相川書房，pp42-45，2007.
- 3) 横川和夫：その手は命づな ひとりでやらない介護、ひとりでもいい老後．太郎次郎社エディタス，pp229-260，2004.
- 4) <http://tiikinotyanaoma.hp.infoseek.co.jp/>
- 5) 白石区区役所総務企画課内スピカ編集部：白石区ライフ & アクションマガジンspica vol.24，2005
- 6) <http://www.npohokkaido.jp/chanoma/>
- 7) <http://ecofree.sblo.jp/category/627346-1.html>
- 8) 2) に同じ，pp74-88
- 9) 安梅勅江：コミュニティ・エンパワメントの技法 当事者主体の新しいシステムづくり．医歯薬出版，pp9-15，2005.
- 10) 岩田泰夫：セルフヘルプ運動．精リハ誌2（2）88-96，1998
- 11) 安梅勅江：エンパワメントのケア科学 当事者主体のチームワーク・ケアの技法．医歯薬出版，pp2-25，2004.

（2009年1月15日受稿）

